

忠臣蔵だより

平成 22 年 6 月発行 No.1 NPO 法人 忠臣蔵を守る会

NPO 法人 忠臣蔵を守る会 設立のご挨拶



理事長 一番ヶ瀬 聖子

行政書士

平成 22 年 6 月 11 日、東京都の認証を得て、設立登記を終了し、無事に特定非営利活動法人（NPO 法人）「忠臣蔵を守る会」を設立いたしました。

これは、長年「元禄事件」の研究をして来たわたしたちにとって、今程、元禄事件研究が荒廃している時期はないと感じ、大いなる危機感を感じたからに他なりません。先ず、大学では、一切「元禄事件」の研究を長期的に行っている学舎は見当たりません。赤穂市ではあるかもしれませんが、あるとしたら、一度講演など拝聴したいものです。（また、講演・講義の予定など、もしあるのであれば、もう少し関係者に知らしめてほしく存じます）

従って、元禄事件を主体に研究されている学者は日本中を探しても居ないと思われまます。わたしたちが「元禄事件研究」において、不明な点が生じて、伺う人すらおられません。現在では、「元禄事件研究」は「近世」に入りますので、近世史を研究されている先生方は「何でも屋」に成ってしまっておられるようです。「元禄事件研究」を専門にされている先生・・・過去における、内海定治郎先生、渡辺世祐先生、福本日南先生、平尾孤城先生、斉藤茂先生のような先生がおいでなのでしょうか。

反面、一部の作家により、日本史の中でも、日本人の精神構造に多大な影響を与えている「元禄事件研究」が大きく歪められております。この現状をなんとか打開しなければなりません。そのために特定非営利活動法人「忠臣蔵を守る会」を設立致しました。言論の自由の時代ですから、誰が何を書いても構いませんが、医者でもない人間が、医学そのものの冊子は書くべきではないという基本的な考えを軸に、今より運動をして参りたいと思っております。もちろんわたしたちは、作家や評論家の「フィクション作品」と「エッセー」については、関知するものではありません。唯、史実の研究家でもない作家や評論家が書いた「日本史」として証明の裏付もない文章は、人々には読ませたくないと願うのみでございます。彼らの稚拙さと不勉強さには、愕然とするばかりで、これらの悪書に代金を支払い納得されている方がいることは残念でなりません。今後、わたしたちは「より正確な元禄事件の史実発表」を機軸に運動をして参りたいと、改めて誓い合ったところでございます。日本人が決して忘れてはならない心が、「忠臣蔵・元禄事件」にはたくさん詰まっているのです。そして、その正しい情報を皆様にお配りしたいと思ひまして、この会報創刊号を上梓致しました。

しかし、当法人のこのような活動は、皆様のご理解・ご支援なくして実現は不可能でございます。どうぞ、皆様のご更なるご支援・ご指導を今後とも賜りますよう、重ねてお願い申し上げ、設立のご挨拶に代えさせていただきます。

旗本がみた忠臣蔵

—えどはくカルチャーの報告

中島康夫、荻原 栄

平成21年12月12日から平成22年2月7日まで、江戸東京博物館において「旗本がみた忠臣蔵」展が行われた。これは兵庫県たつの市龍野歴史文化資料館が所蔵する「若狭野浅野家資料」を展示したもので、これに関連して江戸東京博物館と徳川林政史研究所との共同研究事業成果報告が「若狭野浅野家資料の総合的研究」と題して平成21年12月12日に行われた。引き続き平成22年1月8日から5回にわたって「えどはくカルチャー」として関連講座が開かれた。

●「えどはくカルチャー」では、「若狭野浅野家資料」の内容とその研究成果が報告され、展示されている史料については興味を引くものがあったが、さらに関連して元禄事件についても紹介が行われた。しかし、その内容については、すでに多くの研究者が議論をつくして否定されている「柳之間廊下説」や「塩原因も考えられる」「刃傷の原因は不明」などの発言に見られるように、30年前の知識から少しも進歩していないものであって、最新の知見は無視された解釈であった。まるで、これが日本の歴史に関わっている学者の発言かと疑わんばかりの発表であった。

本講座は元禄事件と深い関わりを持つ、赤穂浅野家の分家、若狭野浅野家資料の研究結果を紹介するものであるから、元禄事件に関してはもう少し勉強（研究されている方はいらっしやらないと判断して、敢えて勉強の文字とさせていただいた）されて発表すべきである。

1. 第1回えどはくカルチャー（H22. 1. 8）

「赤穂事件と江戸文化—忠臣蔵の誕生—」

(1) 「新発見・赤穂事件関係資料を語る」

江戸東京博物館館長による講演が下記の4項目の内容について行われた。

①五代将軍綱吉の治世

歴史家の間では綱吉の評価が、きまぐれで狭量の専制君主から思想的に時代を変えた将軍として少し変わってきているとの説明。

②元禄時代

思想的には文武から忠孝へと武家諸法度が変わった時代。

③若狭野浅野家資料について

「若狭野浅野家資料」の発見の経緯について簡単な紹介が行われた。ただし、平成21年12月12日の江戸東京博物館と徳川林政史研究所との共同研究事業成果報告会において、実際に発見に立ち会った龍野歴史文化資料館学芸員による詳しい報告が行われている。

④新発見史料

「口宣案」「鉄炮洲上屋敷絵図」「浅野内匠頭・四十六士の赦免願」が新発見史料として紹介された。「口宣案」は赤穂浅野家4代と浅野長恒の任官証ともいべきものである。「鉄炮洲上屋敷絵図」は浅野内匠頭長矩の時代の絵図で、この紹介があったが、平成12年12月12日に徳川林政史研究所の研究者によって詳細が報告されており、また龍野歴史文化資料館発行の図録「忠臣蔵と旗本浅野家」にB2版の図面と説明図が付いているのでそちらが今後の研究の参考になる。「浅野内匠頭・四十六士の赦免願」は明治天皇から泉岳寺（大石内蔵助等）に出された勅宣（明治元年11月5日太政官布告983号）の基ともなった、浅野内匠頭と赤穂義士の名誉を挽回した願文案であると考えられる貴重な史料である。

(2) 赤穂事件に関する対談

江戸東京博物館館長と同館教授らによる元禄事件に関する対談が行われた。

●ここで、館長は「浅野内匠頭は白書院の方から来て、吉良上野介に切り掛かった」「刃傷の原因は不明」「刃傷の原因として塩説はなかなかよい」「幕府が討入りを黙認」との認識を披露された。一般に大きな影響を与える館長の発言としては、軽率極まりないものである。

「刃傷の原因は不明」と言われるが、今度の展示物の中に片岡源五右衛門の注進状がある。その一文中に「松之廊下に於いて吉良上野介理不尽の過言を以て恥辱を与えられ、これにより君刃傷に及ばれ候」の一文があるではないか。原因不明と注進状との整合性を語るべきであった。さらに、刃傷の原因を示す史料が多数存在する。「堀部金丸私記」「大石系図附録」「沾徳随筆」「岡本元朝日記」「陽和院書状」「江赤見聞記」等々、十指に余る原因を示す一級史料がある。館長はこれらの史料に目を通した上で原因が解らない、と発言されているのか。公共の歴史館の責任者としては余りにも不用意な発言である。その上「原因として塩説はなかなかよい」など三流の小説家以下の発言でもあった。このような方が税金から支払われる給料を受け取っているのは些か問題がある。監督官庁の東京都もしっかりしてもらわねば困る。

要は、元禄事件については、学者と名乗りながら何も解っていないということである。

2. 第2回えどはくカルチャー (H 22. 1. 15)

「殿中刃傷事件簿—長矩の誤算—」

江戸城における刃傷事件について下記3項目にわけて紹介があった。

(1) 江戸城刃傷事件の数—合計10件—

江戸城での刃傷事件は①寛永元年の弓削多七之助 ②寛永4年の榑村孫九郎 ③寛永5年の豊島刑部小輔 ④貞享元年の稲葉石見守 ⑤元禄14年の浅野内匠頭 ⑥享保元年の川口権平 ⑦享保10年の水野隼人 ⑧延享4年の板倉修理 ⑨天明4年の佐野善左衛門 ⑩文政6年の松平外記の10件があり、他に將軍の法事の際には①延宝8年の内藤和泉守 ②宝永6年の織田采女の事件があることを紹介された。このうち①寛永元年の弓削多七之助の事件については講師の発見であるとの説明。

(2) 各事件の概要・図式・結果・幕府の裁定

各事件について発生年月日、発生場所、状況、結果などが表形式に分かりやすくまとめられていた。

(3) 浅野長矩の誤算

●ここでも、「刃傷の原因は未詳で心神喪失か?」「剣術の心得があれば突く」「冷静であったら忠臣蔵はなかった」との発表の後、「歴史を客観的に眺めればこのような結論」との締めくくりがあった。江戸東京博物館の研究員の方の発表なので、聴講している方々はこれを信じてしまうのではないだろうか。もう少し史料を読まれ、最新の研究結果を勉強された後、歴史を客観的に眺めていただきたかった。

近年「元禄事件」についての新史料がたくさん発見され、中には「忠臣蔵」が180度ひっくり返る程の史料も発表されているなか、江戸東京博物館で働く館長と職員は何も知らなかったということである。

3. 第3回えどはくカルチャー (H 22. 1. 22)

「赤穂事件の時代背景」

赤穂事件の背景としての元禄時代に関して、下記の4項目について説明が行われた。

(1) 元禄時代とはなにか

元禄時代の説明を「大系日本の歴史10江戸と大坂」に書かれた竹内誠氏の文に基づき説明。

(2) 徳川禁令考、世事見聞録などに見る徳川時代

いくつもの史料を挙げて綱吉時代に「文武弓馬」から「文武忠孝」に変化したこと、さらに、江戸時代を通じて町人と侍の意識が変わっていったことを分かりやすく説明。

(3) 梶川氏日記による松之廊下事件

刃傷事件は柳之間廊下でおきたということを、梶川氏日記と江戸城絵図を示しながら説明された。

●浅野内匠頭は大広間の後ろの廊下において、吉良上野介は柳之間の廊下を白書院の方からきたところを、浅野内匠頭が後ろから斬りつけたとの説明であった。いつの間にか浅野内匠頭が数十メートルを瞬間移動して吉良上野介の後ろに回ってしまっているのである。説明している本人が具体的に人物の位置関係をつかんでおらず、また、彼らは何のために松之廊下に集まっているのかその理由もわかっていないために、このようなことになるのである。

不勉強もここまでくると唯々あきれられるばかりである。梶川氏日記を熟読すれば、浅野内匠頭の立位置、梶川の立位置と関係人物の移動がはっきり明示されるはずであるが、講演者の思い付きで発表されても、受講料まで払って聞いている我々にとっては大変迷惑である。

(4) 天明4年の佐野善左衛門による若年寄田沼山城守への刃傷事件

江戸東京博物館に所蔵されている、佐野善左衛門による田沼山城守への刃傷事件の位置図を紹介。

●松之廊下事件もこのくらいの紹介をすべきで、そうでなければ史料を使った中途半端な嘘の説明はしないほうがよい。

4. 第4回えどはくカルチャー (H 22. 1. 29)

「元禄事件と若狭野浅野家—初代長恒の奮闘」

旗本若狭野浅野家について下記3項目の説明が行われた。講師は旗本の研究が専門だけあって、若狭野浅野家に関して大変分かりやすい説明であった。

(1) 若狭野浅野家とは

赤穂浅野家、若狭野浅野家、家原浅野家、浅野大学など複雑な親戚関係をわかりやすく説明。

(2) 元禄事件と浅野長恒

元禄事件についてはこれまでの3回とは違い、無難で簡単な説明だった。

●長恒の石高について、赤穂浅野家が健在していた頃、別枠で2千石合力されていること、更に勢州山田奉行の役料1,500石が加算されていることの説明はされなかった。つまり、長恒は6,500石を配分されていたのである。以上の説明は必要と思われるが、その実態を知ってか知らないでか。

(3) 浅野長恒のその後

浅野美濃守長恒の年譜をきれいに表にまとめてあり、分かりやすいものだった。

終了後、中島特別顧問が質問

●片岡源五右衛門の注進状—展示されている注進状は、研究者の間では偽書といわれていることを中島特別顧問より説明されたが、本物であるとの回答がその場であった。また、本物であれば書状の中に刃傷の原因が示されているが、なぜ、原因は不明といわれるのか。また、元禄14年3月14日の時点で吉良上野介は生きていることも書かれているが、大石内蔵助らはその生死が不明といって城明渡しまでの間、右往左往していた矛盾を指摘したが、ただ赤穂市から借りて写真を展示しているだけであるとの説明だった。

●山田奉行について—山田奉行は通常、伊勢山田に滞在しているのか、との質問に、山田奉行は伊勢神宮の管理もするので、通常は伊勢山田に滞在しているとのこと。松之廊下事件の際には、浅野長恒は山田奉行であったが、たまたま江戸にいたことがわかる。この件については中島特別顧問も同意。

5. 第5回えどはくカルチャー (H 22. 2. 5)

「赤穂浅野家の城」

浅野家関連の城—真岡城、真壁城、笠間城、赤穂城—の構造についての説明と、石垣の積み方による時代の違いなどについて説明があった。講師は城を専門にされている方のため、大変分かりやすくなった。

(1) 赤穂城と浅野家の城

真岡城：丘陵の連郭式で前代を継承 真壁城：平城で前代を継承

笠間城：山城で前代を継承

赤穂城：水城で新規築城、構造的には真壁城に似る

(2) 浅野本家の城

浅野本家の城について説明。特に浅野長政は水城に経験が豊富であるとのこと。

(3) 赤穂浅野家と築城

真壁城の作り方が赤穂城に受け継がれ、さらに、浅野長政の水城の技術がプラスされて作られたのではないかとの見解があった。

●以上を総合的に見ると、それぞれの講師の専門分野については、それなりの整理・研究されていた講演であったが、元禄事件の部分になると、最新の研究成果は反映されておらず、過去に否定された議論を蒸し返すなど、元禄事件の史実研究を逆行させた内容であった。

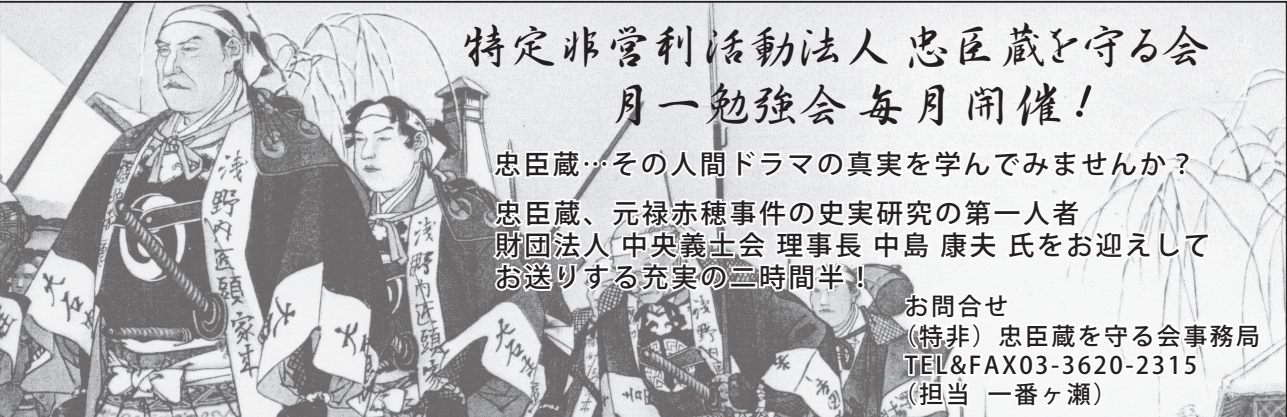
更に、江戸東京博物館が今回の展示品のために編集した「旗本がみた忠臣蔵」(平成21年12月12日発行)の内、プロローグページには、大石良重(長恒の父)の墓として、赤穂花岳寺の写真が掲載されていたが、むしろ、この部分には、港区三田に現存する「正山寺」の大石良重本墓の写真に掲載すべきではなかったか。このことは、正山寺の墓の存在を知らなかったのではないかと判断される。

何より今回の展示物の内に、「片岡源五右衛門の注進状」を展示されたことは、大なる過失と見なければならぬ。更に、学芸員が偽物を本物と豪語するに至っては何をか語らんや、である。過去において元禄事件の専門書に「片岡源五右衛門の注進状」を真書と示した書物があればお示しあれ。「片岡源五右衛門の注進状」を取り上げているのは映画やドラマのみである。東京都の公館として大きな過失である。それでも、一般客は江戸東京博物館の学芸員を微塵も疑わず信じてしまわれることが大きな禍根となる。

このようなお粗末な講演会が行われたということは、史料を三木家より寄贈され、その分析・読解を東京の江戸東京博物館に依頼した、龍野歴史文化資料館側にも大きな責任があると思われる。東京の学者に依頼しても、彼らが元禄事件の研究をしていなければ、唯の素人以下であることを悟るべきである。

更には、元来、今回展示された「若狭野浅野家」の史料はたつの市へ寄贈されるより、赤穂市に贈られて然るべき道筋であった。どちらへ寄贈するのも持ち主の自由ではあるが、他の団体が保有しても「猫に小判」であり「画竜点睛」を欠くことになる。

館長は寄贈された経緯も説明されてはいたが、とても信じられる事由ではなかった。



特定非営利活動法人 忠臣蔵と守る会
月一勉強会 毎月開催!

忠臣蔵…その人間ドラマの真実を学んでみませんか?
忠臣蔵、元禄赤穂事件の史実研究の第一人者
財団法人 中央義士会 理事長 中島 康夫 氏をお迎えして
お送りする充実の二時間半!

お問合せ
(特非) 忠臣蔵を守る会事務局
TEL&FAX 03-3620-2315
(担当 一番ヶ瀬)

『赤穂事件』を読んで

柿崎 輝彦

昨年、平成21年7月、自費出版らしき黒川一夫著『赤穂事件』が発刊された。

著者は、自らを赤穂事件とは全く無縁の者であったとか専門違いであると紹介しているが、随所に表や年譜、図解が駆使され、元工学部教授らしくわかりやすい論文調の仕上がりになっている。

同書25頁に今回の起稿に関する記載がある。

「・・・赤穂事件の真実を明らかにする事が、著者が筆をとる唯一の目的である。・・・赤穂事件に関する研究は文献による調査、研究が先行し実地調査が全くといってよいほど、等閑視されてきた結果、幾多の忠臣が不忠臣の汚名を着せられて、300年が経過している・・・」

ならばどうして(財)中央義士会の門を叩かなかったのか疑問が生じる。おそらくその方が遙かに近道であったろうし、史料に基づく新発見も出来たはずである。同会は明治41年の創立以来100年余り、史料主義、踏査主義で調査を重ねてきた団体である。そうしていれば、本書ももう少し違った内容になっていたと思われる。巻末に指導を仰いだとされる各専門分野の方々の名を挙げておられるが、残念ながら皆元禄赤穂事件に関しては素人の方ばかりである。

さて本書に戻るが、前半は赤穂事件を語るうえで重要な要素となる時代背景の考証である。

元禄期は江戸時代のなかでも政治、文化、生活様式など様々な側面において価値観の変化が見られた時期であったことは説明するまでもないが、本書では將軍綱吉を中心としたその周辺事情を詳しく取上げている。とりわけ綱吉の実母桂昌院への従一位昇叙問題については多くの資料を参考に持論を展開している。とくに従一位問題年譜では、朝幕および護持院や公弁法親王との関係を良く調べ上げている。ただし、この問題は重要ではあるものの直接赤穂事件との関係は薄いため参考程度に留めておく。

つづいては、元禄14年3月14日の松之廊下事件当日についての記述である。当日の殿中での式典や松之廊下事件に関わった当事者および周辺の方々の行動を時系列に示し、独自の目線で当日の

出来事を検証している。主な参考史料は通称「梶川筆記」と「多門伝八郎覚書」である。

重要なポイントとなる殿中での刃傷の原因について、著者の見解を抜粋する。(70頁)

「浅野が刃傷に及んだ原因が、吉良と梶川の短い会話にあったことは、容易に否定できないが、その内容までの検討は類推の域を脱することはできない。・・・いま、この無礼を自分が咎めなければならないという正義感が、浅野を走らせたように思えてならないのが、正直な感想である」

と断定的ではなくやや曖昧な印象を受ける。

この日からはじまる松之廊下事件発生後の様々な裁決を主体とした赤穂事件には、徳川幕府が深く関わっているかのような持論を展開し一方的に結論付けている。

元禄赤穂事件の根幹は、松之廊下事件の解明である。ならば、なぜその原因に関わる史料を網羅されなかったのか。少なくとも「堀部金丸私記」「大石系図附録」「沾徳随筆」「岡本元朝日記」「陽和院書状」「江赤見聞記」その他多々ある一級史料になぜ触れなかったのか。もし以上の史料に疑問があるのであれば、それら一つ一つに反論して初めて著者の論にも目を通せることになるのではないか。

更には「梶川筆記」を正しく解説してこそ、元禄赤穂事件の中枢が見えてくるのであるが、著者もまた某博物館の学芸員と同じく読み方が全く浅い。

さて著者が、本書で主張したかったのは四十七士以外にも忠義の士がいたことへの証しである。

今日にいたるまで、赤穂事件(いわゆる忠臣蔵)においては、見事本懐を遂げた大石内蔵助以下四十六士ばかりが目ざされてきているため、それ以外の人々に焦点をあて、赤穂事件全体の見方、考え方を改めるのが著者の目的のようだ。

ならばどうして架空の逸話に挑むのか理解に苦しむ。多大な時間、経費、労力を掛け、結論が板谷峠での大野九郎兵衛第二襲撃隊の確証が得られなかったでは全く意味を成さない。

真実、四十七士以外の忠義の士に触れるのであれば、なぜ、大石無人・三平親子、堀部文五郎、佐藤條右衛門、甚三郎、寺井玄達、森助、細井

広沢らにスポットを当てなかったのか。彼らは直に四十七士らと接触しており、討ち入る際にも吉良邸門前に待機していた人々である。しかも、それぞれに一級史料の上で証明出来る人物たちである。

本書では、その逸話の主体を一般には退城派の首領として知られる大野九郎兵衛に見立て、各地に残る伝説や俗説に独自の仮説を加え持論を展開していくのである。

今回の主な対象は次の3例である。

- 1、上州磯部村と甲府の大野九郎兵衛
- 2、片岡源五右衛門の家僕元助
- 3、米沢板谷宿の大野隊

いずれも過去の忠臣蔵関係の出版物でも何度となく取上げられており、地元行政誌などでも紹介されるほど良く知られている逸話である。各々の地元には石碑や供養墓などが存在し、今日に至るまで有志の方々によって保存され受け継がれている。本書では著者自らが現地踏査をし、各地元において直接得た情報をもとに独自の目線で検証、考証を展開しているが・・・。

1. 上州磯部村の大野九郎兵衛については、明治後期に出版された熊田葦城著「日本史蹟 赤穂義士」で既にその事柄を伝説として扱っており、その後の研究者も同様に俗説として位置づけてきた逸話である。著者も結果的には磯部村の大野九郎兵衛とされる人物は、その正体が大野本人ではあり得ないと結論付けている。甲府市にある能成寺の大野九郎兵衛の墓碑についても同様である。この様に日本国中、あまたある忠臣蔵伝説に足を踏み入れたら体がいくつあっても足りないであろうし、その伝説の中に第二の忠誠心を見出せる可能性は限りなくゼロに近い。著者の思いが10%でも史実として発見出来れば、これまでの忠臣蔵がひっくり返るであろう。著者の論ずるところの根拠がもし僅かでも一級史料に見つかれば可能性はあるが、残念ながら史料として認められない伝説からは真実は見えてこないものである。

2. 片岡源五右衛門の家僕元助については、地元資料を中心にその生涯を紹介している。

通常、忠臣蔵モノに取上げられることが少ない元助ではあるが、出生の地、群馬県安中市や地元小学校のホームページなどには詳しく取上げられている。また入定の地である安房の長香寺での元助(向

西坊)も、千葉県の観光案内や南房総市の広報に詳しく紹介されており、地元では古くからその遺徳が顕彰されてきた。

とくに元助については、義拳後早くに著された「赤穂義人録」にもその生い立ちや討入り当夜の活躍が紹介されている。しかし残念ながらその内容は、近松勘六の家僕「甚三郎」と取り違えられたものであり、福本日南著の「元禄快拳録」にも同様のことが記されている。また義士研究家の一人平尾孤城に至っては、自著「滅びゆくものの美」のなかで、その存在そのものを否定的に扱っている。

それはさておき、片岡源五右衛門を主人として慕い、後に剃髪し自ら向西坊と称しその霊を弔うため、秋間の岩戸山に長矩夫妻および義士石像を建立し房州和田町で入定した人物がいたことは概ね事実のようである。

しかしながら、片岡源五右衛門の家僕元助については、一級史料に出てこない以上、どこまで行っても伝説である。唯、著者が挙げている1、2、3のうち一番疑問を持たせられるのは元助であることは申し上げておく。

3. 米沢板谷宿の大野隊であるが、俗にいう「板谷峠の伝説」を持ち出し物語が進行していく。

あくまでも史実であることを前提に調査、検証を進めているが、残念ながらその内容には疑問や矛盾が多い。

そもそもの調査のきっかけが、著者が過去に機内放送で聞いた大野九郎兵衛が板谷宿にいたとする宝井馬琴の講談である。きっかけなのでその事については深くは触れないが、とても微妙な感覚である。

この章でも残念ながら赤穂退城後の大野九郎兵衛については、第二襲撃隊であったとする裏付けを明確に打ち出すことが出来なかった。

尚、本書に誤認があったので指摘しておく。

大石内蔵助が送った遠林寺祐海宛の元禄14年7月22日の手紙を著者が偽書であると断じている部分である。(同書194頁)

この手紙は、内蔵助が主家再興運動として赤穂遠林寺住職祐海を江戸に遣わし、神田護持院隆光大僧正並びに音羽護国寺快意僧正に赤穂浅野家の復興を懇願したことなどの報告に対する内蔵助の返書である。書中には内蔵助が自身を野生と称し、自らを謙るなど主家再興への可能性を見究めようとする心が綴られている大変貴重な書簡である。この書状は、近年まで大阪府豊中市の某氏が所有し

ており、筆跡も大石内蔵助のものと確認されている。専門に研究している者が見れば、それが偽書であるか真書であるかは自らわかるものである。

しかし著者はこの中に出てくる「瑤泉院様」の記述を取上げ、この書状を偽書と断じている。

その最大の理由は、内匠頭室阿久里が法名を寿昌院から瑤泉院へ改めたのは、桂昌院が神格化される元禄 15 年 3 月以降であり、この時期（元禄 14 年 7 月）に瑤泉院の法名が出て来ることは絶対にあり得ないとする勝手な憶測からである。

この件については浅野綱長伝「原題顯妙公濟美録」という浅野本家で編纂された伝記に詳しいので紹介しておく。

底本の一つ、御用人日記の元禄 14 年 4 月 6 日の項に

「壽昌院様御名瑤泉院様と御改被成下旨柴原左平二より申来ル」

また、同じく底本である家秘抄に、

「御奥様御事十四日之夜中御絶髪被成壽昌院と御改被成也、但五七日過瑤泉院様と御改被成、桂昌院様ノ昌ノ字何方にても御遠慮被成由二付、安藝守様より御指図二付御改被成也」

とある。これを要約すると

「内匠頭室阿久里は三月十四日夜中に今井の御実家へ出発する前の鉄炮洲屋敷において落飾され寿昌院と改められた。ところがこの法名は將軍綱吉の母、桂昌院と昌の字が同じなので遠慮すべきであると本家安藝守様からの指図が 4 月 6 日にあり、五七日（35 日の忌明け法要）過ぎに法名を瑤泉院に改めた」ということになる。

一般に七七日（49 日）が 3 ヶ月に跨る場合は、

五七日（35 日）で忌明けとする風習がある。

この件は、渡辺世祐著の「正史赤穂義士」や齊藤茂著の「赤穂義士実纂」など多くの研究書ですでに明らかにされている内容である。とくに本書は参考資料欄に、浅野綱長伝が所収されている赤穂義士史料を掲出しており、もう少し詳しく史料を調べていればこのような誤りはなかったはずである。

総論、本書は赤穂義士に大変好意的な立場で著されていたことが唯一の救いである。また赤穂事件周辺についての記述は他書にないほどの考察である。しかし、空想や立証されないままの仮説や俗説を多く取り入れ過ぎてしまい、結果的に専門書としては説得力に欠ける内容になってしまったことは否めない。全般的には歴史書としての風格も備わって

おり文章も説得性が高い。しかし、著者が大学教授の要職についていたこともあり、誤った記述はその影響も大きく問題である。

最後に、若者を中心に興味関心が薄れかけている忠臣蔵周辺事情について意見を述べる。

某著名作家に代表されるように、過去の歴史認識を裏づけもなく単に否定したり、研究家によって既に結論付けられた事柄にまで言及し、孫引きの受け売りや小説までをも参考にして、その内容を稚拙な論法ですり替えるケースが目につく。それが近年における元禄赤穂事件の自費出版らしき著書の共通した性格である。それらの著者に共通して言えることは、松之廊下事件すら読み解けていない事である。

また、一般に社会的な肩書きがあった方や現在その地位にある方の意見は計り知れない影響を及ぼすものである。過去に現職の医師が、ある作家による内匠頭の持病といわれる癩の遺伝についての説に感化され、もっともらしく見解を述べた記事が新聞に載り本にもなった。いくら医学が進歩したとはいえ、DNA 鑑定もなく癩の遺伝が 300 年も遡って立証できるものなのだろうか。医師の発言だけに実に恐ろしいことである。

今まで忠臣蔵そのものが、日本人の精神文化の象徴として存在してきただけに、その逆を論ずることで注目が集まるのも悲しい性である。

昨今、時代考証の進んだ史実の『元禄赤穂事件』と広く世間に伝わっている劇作『忠臣蔵』や数多ある『義士伝』をもっともっと発展的にコラボレーションさせ、忠臣蔵が更なる崇高な日本文化として再興することを願って止まない。

『赤穂事件』

著者 黒川一夫（1925 年生まれ）

出版社 青史出版株式会社

発行年 2009 年 7 月 10 日

電話 03-5227-8919

定価 9,450 円

著者略歴

1953 年 東京大学工学部卒業

1971 年 通産省電総研電子計算機部長として退職

1981 年 日本シミュレーション学会初代会長就任

1999 年 理工系大学工学部教授退職

赤穂市で「忠臣蔵歌絵巻」公演開催

若林 誠二

昨年の12月12日、赤穂義士祭前々夜祭行事、歌と講談で綴る忠臣蔵の世界「忠臣蔵歌絵巻」と題した公演が財団法人赤穂市文化振興財団、財団法人中央義士会、赤穂義士祭奉賛会の共催により赤穂市文化会館・ハーモニーホールで開催されました。この公演の出演者は中央義士会所属の歌手、講談師を中心とした一座を中央義士会の富岡副理事長が率いていったものです。

今回のこの公演が実現したきっかけは、平成20年10月18日に行われた中央義士会100年祭の記念パーティーに遡ります。会員による手作りのパーティーでしたが本当に心のこもった充実した楽しいパーティーで、今もはっきりと記憶に残っております。ご来賓の祝辞、ご来賓への感謝状贈呈、中央義士会中島理事長の記念講演、祝宴、お楽しみ抽選会、居合演武に続いて、最後の盛り上げが歌謡・演芸のパフォーマンスでした。富岡さんの名司会によりスタート。まず加東竜次さん(中央義士会参与)歌う「赤穂の春」に始まり、大金吾さん(中央義士会参与)の「刃傷松之廊下」、若林の講談「大石の東下り」、続いて富岡さん実妹小唄師匠匠筒寿美師の小唄の弟子山口瑠美さんの歌う「赤垣源蔵」、大トリは大金吾さんの「俵屋玄蕃」で締めました。この時のショーの企画構成演出はすべて大金吾さんが担当されたものでした。

このショーをご覧になっておられた赤穂市・豆田市長から「これと同じショーを是非一度赤穂市でもやって頂きたい」とのお褒めのお言葉を頂戴しました。富岡さん始め出演者一同、このお言葉を頂いただけでも感激をしておりましたところ、本当に赤穂市観光商工課の安部課長より中央義士会中島理事長にオファーがあり、またまた感激を味わうことになりました。なにしろ、忠臣蔵の歌や講談をやっている者にとってやはり本場の赤穂市でやるということは嬉しい限りです。お話を頂いた時には心から喜んだのは当然のことです。

さて、本公演を行うに当たり大金吾さんは再び企画を練り直し、2時間の公演を組み立てました。しかも、本番前には3日前から赤穂入りし、舞台の音響効果や照明などすべての準備をされました。聞くところによれば前日はほぼ徹夜だったとか。本当に頭が下がりました。

当日は、まず最初は出演歌手による「名刺代わり」の歌声(新曲披露)、「序章・今様吟詠と忠臣蔵をしのぶ」と題して吟詠精道会会長毛塚静精さんの吟詠(今回初参加)、加東竜次さんの「赤穂の春」、「第二章・忠臣蔵絵巻『赤穂事件』」と題して大金吾さんのご存知「刃傷松之廊下」から「無念!春の名残り」そして「赤穂城明け渡し」の熱演。ここで10分の中入りがあり、「第三章・討ち入りへ『講談と歌謡浪曲』」です。幕が上がったところからスポットライトが当たり私(若林鶴雲)の講談「大石の東下り」となりました。講談をやる時は、舞台下手の方から歩いてきて舞台の中央に座って始めるのが普通ですが、今回は、最初から舞台の中央の釈台の前に座っていて、いきなり幕が上がるといった進行でした。ですから「1分前です!」と声が掛かってから徐々に緊張感が増していくのは初めての経験でした。心臓が高鳴ったのを覚えています。しかし、幕が開いて「バシッ!」とひとつ張扇を叩いた瞬間に気合が入りました。しかも、100年祭の時は時間があまりないので、12分間でしたが、今回は25分間頂いたため話を膨らませてじっくりと講談をやらせて頂き講釈師冥利に尽きる思いでした。そのあと、大金吾さんの「ああ忠臣蔵」、山口瑠美さんの「赤垣源蔵」、そして大金吾さん十八番の「俵屋玄蕃」で締めました。

歌謡あり、吟詠あり、講談あり、浪曲ありと、絶妙のコンビネーションにより会場に集まった300人近いお客様を飽きさせることなく、大いに満足させる公演であったと思います。赤穂市長からも暖かい御礼状を頂戴しました。それには、多くの方々から「いろいろなジャンルの忠臣蔵、赤穂義士を楽しめた」とのお褒めの言葉が寄せられたと書かれてありました。

なお、公演の準備段階から本番、そして仕上げに至るまで何から何まで赤穂市・企画振興部観光商工課の安部課長様には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。そればかりではなく、何と公演直前の楽屋には赤穂豆田市長自ら直々にお越し頂き、出演者を激励して下さいました。出演者一同改めて心から御礼申し上げます。

今後とも史実追求のみならず、芸能の立場からも忠臣蔵、赤穂義士への支援を微力ながら続けて参りたいとの思いを、出演者一同新たにした公演でした。

NPO法人設立記念

第6回忠臣蔵通2級検定試験問題

[申込方法]

- 検定試験の受験をご希望の方は、住所、氏名、電話番号、FAX番号並びに、第6回2級検定試験申込と記入した用紙を、下記宛てFAXまたは郵送でお送り下さい。FAXをお持ちの方は、できるだけFAXでお願い致します。折り返し受験要項をお送り致します。

宛先 〒120-0002 東京都足立区中川4-8-7-504

NPO法人 忠臣蔵を守る会

TEL/FAX 03-3620-2315

- 受験要項に従って、検定試験料をお振り込み下さい。お振り込みで受験申込となります。
- 可否は11月になってからお知らせ致します。

[注意事項]

- 合格点は80点です。24問以上正解で合格となります。
- ご自宅で資料を調べて解答していただいて結構です。
- 試験問題解答を調べるために、お電話等で各施設へ直接問い合わせることはおやめ下さい。
- 同じく、会員、受験者同士でも試験のための連絡はおやめ下さい。特に申し上げるのは、連絡しあっている方は、同じ答えで間違っているのですぐにわかります。
- 問題をよく読んで、一言一言理解した上で、解答して下さい。問題を読み間違えないようお願い致します。ひっかけ問題も出題されています。
- 記入問題については、解答用紙以外に別紙を添付していただいても結構です。
- 受験料は締め切りの1ヶ月前までにお納め下さい。
- 最終提出日は、平成22年10月末日です。

平成22年6月

第1問	松之廊下事件の原因がよく分からない、と主張される学者や作家がありますが、あなたはその方々についてどのように思われますか。
第2問	明治22年頃から元禄事件の史実は少しずつ世の中に浸透してきましたが、昭和期までの著名な元禄事件研究者を3名挙げて下さい。
第3問	地元では、吉良上野介は名君とされておりますが、上野介は実際に名君だったのでしょうか。あなたの考えを書いて下さい。
第4問	四十七士が引揚げの時、吉良邸裏門から出てきたのは47名でしたが、泉岳寺に入ったのは44名でした。残りの3名はどうしたのでしょうか。3人の名を書き、それぞれどうしたのかを簡単に書いて下さい。
第5問	元禄事件が起きた頃の赤穂浅野家の城代家老はどなたでしたでしょうか。
第6問	元禄事件が起きた頃、赤穂城には犬が何匹いたのでしょうか。

第19問	<p>赤穂義士それぞれの容姿はよく分かっておりませんが、史料に従い当てはまる義士の名前を1名ずつ書いて下さい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年寄りで大柄だった義士 () ・首が猪首だった義士 () ・わりと小柄だった義士 ()
第20問	<p>赤穂城開城後、藩士であった橋本平左衛門は大坂で遊女と心中してしまいますが、その後始末をした義士はどなたでしょうか。</p>
第21問	<p>前原伊助、神崎与五郎らの書いた「赤城盟伝」について誤っている文章はどれでしょうか。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 全文漢文で書かれている。 2. 「赤城盟伝」の内容は、大石内蔵助には好かれなかった。 3. 編年・日記風に書かれている。 4. 本書は、またの名を「絶櫻自解」ともいう。
第22問	<p>赤穂開城後、魚釣りだけをしていて、討入り前はあまり目立った活躍をしていなかった方はどなたでしょうか。</p>
第23問	<p>赤穂義士の中で、商家から武士になった方がいます。どなたでしょうか。</p>
第24問	<p>赤穂義士の中で、寡黙（無口）な方が2名おりましたが、その方の名前を書いて下さい。</p>
第25問	<p>吉良邸討入りの際、決められた持ち場を破って勝手に行動した義士がおりました。どなたでしょうか。</p>
第26問	<p>下記は、歴史に詳しい先生の説明です。元禄事件のあった300年前頃のお話ですが間違いが1つあります。どれでしょうか。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. あの頃の江戸の道路幅は、平地の場合、現在の半分と見ればよいでしょう。 2. あの頃の江戸の地面は、現在の道路面より1.5m～2.0mくらい地下になるでしょう。 3. あの頃の年齢は、満ではなく数えでした。 4. あの頃の1両は、現在の物価で10万円ぐらいに値するでしょう。 5. あの頃の1間は、現在と同じ180cmの長さでした。
第27問	<p>赤穂城は元禄14年4月19日に明け渡しますが、その後、大石内蔵助たちはある所で残務整理をしていましたが、そこはどこでしょうか。その名を書いて下さい。</p>
第28問	<p>赤穂義土方へ一番初めに、元禄15年12月14日の吉良邸茶会を知らせた国学者がおりました。どなたでしょうか。</p>
第29問	<p>加瀬村幸七と室井左六の主人はどなたでしょうか。</p>
第30問	<p>浅野内匠頭は生前「威徳声尊者」という羅漢像をある寺に寄進しました。なんという寺でしょうか。</p>

祝 N P O 法人設立

特別顧問 中島康夫

設立にご協力下さいまして厚く御礼申し上げます。

祝 N P O 法人設立

理事長 一番ヶ瀬 聖子

N P O 法人「忠臣蔵を守る会」の創立を御祝いたします。

祝 N P O 法人設立

副理事長 萩原 栄

N P O 法人「忠臣蔵を守る会」の創立を御祝いたします。

N P O 法人 忠臣蔵を守る会 副理事長

(財) 中央義士会公認 忠臣蔵博士

若林 誠 二

*忠臣蔵の史実をわかりやすい講演で語ります。

交通費のみご負担いただければ、どちらでも参ります。

TEL・FAX 03-3430-3591 (へ)連絡下さい。

祝 N P O 法人

監事 柿崎輝彦

N P O 法人「忠臣蔵を守る会」の創立を御祝いたします。

横浜市港北区在住

祝 N P O 法人設立

役員 富岡 克

N P O 法人「忠臣蔵を守る会」の創立を御祝いたします。

祝 N P O 法人設立

役員 丸山裕之

N P O 法人「忠臣蔵を守る会」の創立を御祝いたします。



東京都港区新橋 4-27-2

TEL 03-3431-2512

FAX 03-3431-2548

<http://www.e-monaka.com>

地方発送承ります。

祝 N P O 法人設立

役員 成清寛徽

千葉県浦安市在住

祝 N P O 法人設立

役員 椎野恭治

N P O 法人「忠臣蔵を守る会」の創立を御祝いたします。

祝 N P O 法人設立

高松ローンテニスクラブ

オーナー 上原 益雄

(財) 中央義士会 評議員

東京都練馬区高松

祝 N P O 法人設立

役員 鈴木敏弋

N P O 法人「忠臣蔵を守る会」の創立を御祝いたします。

祝NPO法人設立

塚原裕子

NPO法人「忠臣蔵を守る会」の創立を御祝いします。

NPO法人 忠臣蔵を守る会

役員 金子堅一

東京都荒川区在住

祝NPO法人設立

福本精一

NPO法人「忠臣蔵を守る会」の創立を御祝いします。

祝NPO法人設立

(財)中央義士会

理事 飯塚利男

〒114-0031

東京都北区中十条1-12-10
電話 03-3906-6924

吟詠精道会

会長 毛塚静精

〒158-0083

東京都世田谷区奥沢1-3-13
03-3729-4431

千二百年ほど前からの中国の漢詩。日本でも忠義に満ちた心肝貫いた政治家学者が活躍のかたわら、立派な詩を残している。それを和歌・俳句も朗詠して心豊かに又親睦を高め、優雅さ、迫力を味わい、健康につなげています。

祝 会報創刊号

キングレコード専属

大(おおい)金吾(本名・梁田 欣吾)

最新曲・人を育み、未来を育む・・・船村 徹情歌!

『二宮金次郎』「カラオケ配信!絶好評」

TEL・FAX 03-3465-4707

祝NPO法人設立

(財)中央義士会

理事 松岡康彦

NPO法人 忠臣蔵を守る会

三輪三郎

川崎市麻生区在住

祝NPO法人設立

杉山正信

NPO法人「忠臣蔵を守る会」の創立を御祝いします。

祝NPO法人設立

内山晴代

NPO法人「忠臣蔵を守る会」の創立を御祝いします。

もっと知りたい忠臣蔵

石井恒男

相模原市在住

祝 NPO 法人設立

高部 通子

NPO 法人「忠臣蔵を守る会」の創立を御祝いたします。

祝 NPO 法人設立

三好 一行

NPO 法人「忠臣蔵を守る会」の創立を御祝いたします。

祝 NPO 法人設立

吉田 正忠

(子孫)

NPO 法人「忠臣蔵を守る会」の創立を御祝いたします。

祝 NPO 法人設立

高城 和夫

NPO 法人「忠臣蔵を守る会」の創立を御祝いたします。

(財) 中央義士会

評議員

勝田 芳造

(子孫)



家紋「蛇」
〒113-1004 東京都墨田区立花四-137-18
電話 03-3611-3317

忠臣蔵サミット

平成二十三年二月四日

山鹿・八千代座にて開催

(財) 中央義士会 山鹿支部

会員一同お待ちしております

The 47 Black Cats
"SAMURAI CLASH"
©Masami Mookawa

絵本 赤穂義士物語
好評発売中!
英&仏語訳付

The 47 Black Cats Planning
〒678-0239
兵庫県赤穂市加里屋 98-17
赤穂孔版内 前川真早美
TEL 0791-42-3291
FAX 0791-42-3350

(財) 中央義士会創立100年記念出版

「渡辺忠臣蔵」

大石内蔵助編

定価一、〇〇〇円(税込) 送料一〇〇円
編著・出版 (財) 中央義士会
TEL (048) 993-2591

編集後記

(一) 江戸博の「浅野家関連講座」を拝聴して思うことは、日本の歴史に携わっている方々でも、この程度の知見しか表せないものであるから、「元禄事件」は本当に研究されていない事が、つくづく思い知らされた。

(二) 黒川一夫氏の「赤穂事件」に目を通して思うことは、一端の素人が「俺でも」と思わせるのが「忠臣蔵」である。現在まで自費出版的な著書で欣快な書は一冊もない。お尻の浮いた名著ばかりである。

(三) 現代は、皆さん一人一人が偉く、人に頭を下げてまで教えを乞う時代ではなくなつた。その影響で、専門家や弟子が少なくなつてきている。

(四) 本腰を入れて、更に偏らず「元禄事件」を研究している方々が、今の日本に何人いるだろうか。志のある方は、共に同じ道を歩もうではありませんか。

月一回、新橋の港区の施設で勉強会を行つております。是非、一般の方々の参加をお待ちしております。

(五) 本会報について、「ご一考あればご一報いただきます」。万人の方々に耳を傾ける大いなる気持ちでいるので内部の意見、外部の意見問わずお待ちしております。

編集者 中島康夫 (企画・編集・検証)

萩原 栄 (編集) 若林誠二 (校正)

富岡 克 (校正)

(株) 正大印刷社 (印刷)

NPO 法人 忠臣蔵を守る会

〒120-0002 東京都足立区中川四-18-17-1504

TEL/FAX 03-3620-2315

メール office@chuushingura.jp

URL http://www.chuushingura.jp/

平成22年6月 第6回忠臣蔵2級試験問題解答票

1			
2	研究者名 () () ()		
3			
4	() () ()		
5	名前	6	犬の数 () 匹
7	名前	8	人数 () 名程度
9	番号	10	宿舎名
11			
12			
13	名前	14	番号
15			
16	かなまる→ () よしちか→ () よしお→ ()		
17	磯貝十郎左衛門→ () 富森助右衛門 → () 赤垣源蔵 → ()		
18	番号	19	名前 () () ()
20	名前	21	番号
22	名前	23	名前
24	名前 () ()		
25	名前	26	番号
27	場所名	28	名前
29	加瀬村幸七 () 室井左六 ()	30	寺名

- 提出期限は、平成22年10月末日必着です。
- FAXでも受付けます。FAX番号 048-993-2592
- この答案用紙はコピーをして、予備を作っておいて下さい。
- 答案用紙の提出は期間内、一度のみです。
- 他の受験者・会員に答を教えたと不正になります。

氏名			
住所	〒	電話	
		FAX	